

夏〜秋の漢詩

平成二十六年(2014)七月二十五日金曜日⇨旧暦六月二十九日

二十四節気	雑節・節句・その他
七月二十三日：大暑	八月二日：七夕(旧暦七月七日)
八月七日：立秋	九月一日：二百十日
八月二十三日：処暑	九月八日：中秋の名月(旧暦八月十五日)
九月八日：白露	九月二十日：彼岸
九月二十三日：秋分	十月二日：重陽(旧暦九月九日)
十月八日：寒露	十月二十日：土用
十月二十三日：霜降	

★消暑(銷暑) 消暑の漢詩

夏夜追涼

楊万里(1127〜1206)

夜熱依然午熱同 夜熱 依然として午熱に同じ  
 開門小立月明中 門を開き 小く立つ 月明の中  
 竹深樹密虫鳴処 竹深く 樹 密にして 虫鳴く処  
 時有微涼不是風 時に微涼有り 是れ風ならず

カヤ、リヨウをおう。ヨウバンリ。ヤネツ、イゼンとしてゴネツにオナジ。モンをヒ  
 ラキ シバラくタツ ゲツメイのウチ。タケ フカク キ ミツにして ムシナクトコ  
 ロ、トキにビリヨウ アリ コレカゼならず。

★二十四節気の「白露」と中秋の名月

月夜憶舎弟

杜甫(712〜770)

戍鼓断人行 戍鼓 人行断え  
 边秋一雁声 边秋 一雁の声  
 露从今夜白 露は今夜より白く  
 月是故乡明 月は是れ故郷に明らかならん  
 有弟皆分散 弟有り 皆分散す  
 无家问死生 家の死生を問ふ無し  
 寄书长不达 書を寄するも 長く達せず  
 况乃未休兵 况んや乃ち未だ兵を休めざるをや

ゲツヤ、シヤテイをオモウ。トホ。ジュコ、ジンコウ タネ、ヘンシユウ イチガンのコエ。ツユはコンヤよりシロク、ツキはコレコキョウにアキラかならん。オトウトアリ、ミナ ブンサンす。イエのシセイをトウナシ。シヨをヨするもナガクタツせず。イワンヤスナワちイマダヘイをやめざるをや。

yu4 ye4 y4 she3 dia du4 fu3 shu4 gu3 duan4 ren2 xing2 / bian1 qu1 yi1 yan4 sheng1 / lu4 cong2 jin1 ye4 bai2 / yue4 shi4 gu4 xiang1 ming2 / you3 dia4 jiel fen1 san4 / wu2 jial wen4 si3 sheng1 / ji4 shui chang2 bu4 da2 / kuang4 nai3 wei4 xiul bing1

※759年、四十八歳の杜甫が家族とともに漂泊の旅を続けていた時の漢詩。

戊≡慣用音「ジュ」、呉音「ス」、漢音「シユ」。「戊(ジュツ)」「戊(ボ)」とは別字。

### ★七夕の説話の起源

六朝・梁の殷芸『小説』より(明代の『月令広義』七月令の逸文)

天河之東有織女、天帝之子也。年年機杼勞役、織成雲錦天衣、容貌不暇整。帝憐其独处、許嫁河西牽牛郎、嫁後遂廢織紵。天帝怒、責令歸河東、但使一年一度會。

天の河の東に織女(しよくじよ)有り、天帝の子なり。年年、機杼(きちよ)に労役し、雲錦の天衣を織り成し、容貌を整ふるに暇(いとま)あらず。天帝、其の独处を憐れみて、河西の牽牛郎(けんぎゅうろう)に嫁すことを許す。嫁して後、遂に織紵(しよくじん)を廢す。天帝怒り、責めて河東に帰らしむ。但だ、一年に一度會はしむ。

### ★乞巧奠(きっこうでん)の起源

梁・宗懐『荊楚歲時記』より

七月七日、為牽牛織女聚會之夜。是夕、人家婦女結綵縷、穿七孔針、或陳幾筵酒脯瓜果於庭中以乞巧。有喜子網於瓜上。則以為符応。

七月七日、牽牛・織女の聚會の夜と為す。是の夕、人家の婦女、綵縷(さいる)を結び、七孔の針を穿ち、或は金銀・鍮石を以て針と為し、几筵・酒脯・瓜果を庭中に陳ね、以て巧を乞ふ。喜子の瓜上に網すること有れば、則ち以て符応と為す。

※乞巧≡(針仕事の)腕前の上達を祈ること。鍮石≡真鍮、黄銅。喜子≡蜘蛛(クモ)

### ★中秋の名月と玄宗皇帝

樂史(930-1007)の伝奇小説『楊太真外伝』に引用する「霓裳羽衣曲」の起源説話二種のうちの一つによると、玄宗は道士の導きで天上の月宮殿に遊び、そこで聞いた天女の舞樂を忘れられず、地上に戻ってから霓裳羽衣の曲を作ったという。

又『逸史』云。羅公遠天宝初侍玄宗、八月十五日夜、宮中玩月、曰「陛下能從臣月中遊乎」。乃取一枝桂、向空擲之、化為一橋、其色如銀。請上同登、約行数十里、遂至大城闕。公遠曰「此月宮也」。有仙女数百、素練寬衣、舞于広庭。上前問曰「此何曲也」。曰「霓裳羽衣也」。上密記其声調、遂回橋、却顧、隨步而滅。且諭伶官、象其声調、作霓裳羽衣曲。

又『逸史』に云ふ。羅公遠、天宝の初めに玄宗に侍す。八月十五日之夜、宮中に月を遊ぶ。曰く「陛下、能く臣に従ひて月中に遊ぶや」と。乃ち一枝の桂を取りて空に向ひて之を擲てば、化して一橋と為る。其の色は銀の如し。上に請ひて同に登り、約、行くこと数十里、遂に大城闕に至る。公遠曰く「此れ月宮なり」と。仙女数百有り、素練寬衣、広庭に舞ふ。上、前みて問ひて曰く「此れ何の曲か」と。曰く「霓裳羽衣なり」と。上、密かに其の声調を記し、遂に橋に回り、却りて顧みれば、歩に隨ひて滅す。且に伶官に諭し、其の声調を象りて霓裳羽衣の曲を作らしむ。

(参考) 謡曲『邯鄲』より

月人男の舞なれば、雲の羽袖を重ねつ、喜びの歌を、謡ふ夜もすがら

(参考) 白居易「長恨歌」の末尾 楊貴妃と玄宗皇帝と七夕

：七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願作比翼鳥、在地願為連理枝。天長地久有時尽、此恨綿綿無絕期。

七月七日長生殿、夜半人無く私語するの時。天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と為らん。天長く地久しく時有りて尽きんも、此の恨は綿綿として絶ゆる期無からん。

★漱石の房総半島旅行

無題

夏目漱石(1867～1916)

西方決皆望茫茫	西方	皆を決し	望めば茫茫たり
幾丈巨濤拍乱塘	幾丈の巨濤	乱塘を拍つ	
水尽孤帆天際去	水尽きて孤帆	天際に去り	
長風吹滿太平洋	長風吹き滿つ	太平洋	

ムダイ。ナツメソウセキ。セイホウ、マナジリをケツしてノゾめばボウボウたり。イクジヨウのキョトウ、ラントウをウツ。ミズ ツきて コハン テンサイにサリ、チヨウフウ フキミツ タイヘイヨウ。

※明治二十二年(1889)、二十三歳の漱石は八月七日から月末まで房総半島を旅行。漢詩文の紀行文『木屑録』(ぼくせつろく)を書き、親友の正岡子規に見せた。

★日清戦争(1894年7月25日から1895年11月30日)の漢詩

無題

勝海舟(1823～1899)

隣国交兵日 隣国 兵を交ふるの日

其戦更無名 其の戦い 更に無名なり

可憐鶏林肉 憐れむべし 鶏林の肉

割以与魯英 割きて以て魯・英に与ふ

ムダイ。カツカイシュウ。リンゴク、ヘイをマジうるのヒ、ソのタタカイ サラにムメ  
イなり。アワれむべし、ケイリンのニク、サきてモツてロエイにアタウ。

※鶏林||朝鮮半島の古名 魯英||ロシアとイギリス

(参考)勝海舟『氷川清話』より「日清戦争には、おれは大反対だったよ。なぜかって、兄弟喧嘩だもの犬も喰はないじゃないか。(中略)一体支那五億の民衆は日本にとつては最大の顧客サ。」

金州城

正岡子規(1867～1902)

旌旗十万捲天来 旌旗 十万 天を捲きて来る

一戦国亡枯骨堆 一戦して国亡び 枯骨 堆し

犬吠空垣人寂寞 犬は空垣に吠え 人は寂寞

満城風雨杏花開 満城の風雨 杏花開く

キンシュウジョウ。マサオカシキ。セイキ ジュウマン テンをマきてキタる。イツセ  
ンしてクニホロび、ココツ ウズタカシ。イヌはクウエンにホえ、ヒトはセキバク。マン  
ジョウのフウウ、キョウカ ヒラク。

※明治二十八年(1895)四月二十八日、新聞「日本」の連載記事「陣中日記」より  
金州城||現在の中華人民共和国遼寧省大連市金州区。日露戦争でも激戦地となった。

以上